

カナのぶどう酒とイエスの「時」

年間第2主日 C年

イエスの「時」というのは、ヨハネ福音書に目立つテーマの一つです。13章で言われている「時」とは、イエスがこの世から御父のもとに移られる時で、最高の愛が示される時です。それはまた、イエスの受難と死という最大の苦しみの時であり、同時に最高の栄光を受けられる時でもあります。ところで、今日の福音で読まれるカナの婚礼の話で、イエスの母マリアは、「ぶどう酒がなくなりました」とイエスに伝え、イエスは答えて言われます。「婦人よ、わたしの時はまだ来ていません」。マリアはイエスの返答をどのように理解したのかわたしたちには分かりません。ただ理解できるのは、その受け答えによって、母と子の間に言葉を越えたコミュニケーションがあり、その結果、マリアは、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と召し使いたちに伝えたということです。一体この水から変えられたぶどう酒とイエスの「時」にはどのような関係があるのでしょうか？

その答えを見いだすために、前後関係を明らかにする必要があります。わたしたちは、主イエスの不思議な業を奇跡と言いますが、ヨハネは、「しるし」と呼んでいます。しるしとは、目に見えていることとは異なる他のことを指し示す行為です。考えてみると、主の生活には当然、そうしたしるしが必要だったと思われます。主は、イスラエルの伝統の中では、これまでだれも言ったことのない重大な発言をし、神ご自身のような権威をもって、人間以上の者であることを暗示する言葉を語るからです。それを耳にする人は、主がご自分について真理を語っておられると信じる助け、聖霊の働きが信仰に変えられる何かが必要であったのです。それこそ、しるしが果たす役割です。

今日の福音では、ごく普通の結婚のエピソードのようですが、実はそうではなく、不思議な結婚の意味を考えさせられます。今日の第一朗読のイザヤ預言者はそれについて語っています。「若者がおとめをめとるように、あなたを再建される方があなたをめとり、花婿が花嫁を喜びとするように、あなたの神はあなたを喜びとされる」（イザ 62・5）。このように何世紀にもわたって、預言者たちは神とイスラエルの民との契約を結婚の特別な絆のように表してきました。しかし、イスラエルの民の不忠実はその関係が完全になることを妨げてきました。そして神ご自身がイスラエルの罪が引き起こす問題に解決をもたらしてきたのです。イザヤはこのように語ります。「あなたは再び捨てられた女と呼ばれることなく、あなたの土地は再び荒廃と呼ばれることはない。あなたは望まれるものと呼ばれ、あなたの土地は夫を持つものと呼ばれる」（イザ 62・4）。しかし、その計画はどのように行われるのでしょうか。洗礼者ヨハネがそれを指摘しました。「世の罪を取り除く神の小羊」がすでに来ておられ、聖霊で洗礼を受ける「神の子」がそれを再建されるのです。しかもその方のことをイスラエルの花婿、イスラエルの夫と呼び、その方は神と民との愛の関係を完全にすることになっています。

これに照らして、イエスの「時」とカナでイエスが行われたしるしとの関係について、答えを見いだすことができるでしょう。神と民との間に完全にされなかった愛の結婚はぶどう酒がなかったからです。水から変えられたぶどう酒は、神とご自分のものである人間との最も親しい関係を指しています。イエスは神として、水の創造者として、それをぶどう酒に変えられます。後にぶどう酒をご自分の血、新しい、永遠の契約の血、神と民との決定的な和解、最も親しい一致のしるしである血に変えられます。つまり、カナのぶどう酒はイエスの「時」、神との和解をもたらすイエスの受難と死、愛の最高の行為を指し示しています。今日の福音が伝えるとおりに、イエスをご自分の栄光を現し、弟子たちはイエスを信じました。それは、ぶどう酒というしるしが役割を果たしたということです。ぶど

う酒に変えられた水は、洗礼者ヨハネが伝えていたとおり、イエスが「世の罪を取り除く神の子羊」、「神の子」であると信じる助けになりました。主が奇跡によってご自分の栄光を現された結果、使徒たちは聖霊によって、主への信頼、主に対して全面的なゆだねを意味する信仰を起こすことができました。

一方、主がご自分の栄光を現されたことを少しでも理解するなら、カナのエピソードは主の生活全体の計画を現すということも理解できるでしょう。主の生活全体は、まさにご自分の栄光を現すことだからです。聖書が言う神の栄光とは、物と出来事によって現されますが、いわば、神の秤で量られる物と出来事の重さなのです。たとえば、幼きイエスの聖テレジアの生活は、無神論者の秤で量られるとすれば価値のない、無に等しいものと考えられるでしょう。しかし、神の秤で量るなら、真に価値のある尊いもので、神の栄光を現すものでした。その栄光には一種の輝きがともなうものです。たとえば、正確に物事を観察することを学んだ学者は、宇宙が見事なものであることを悟ります。しかし、信仰者の目には、鋭い観察で発見される宇宙の素晴らしさ以上の重さを持っています。創造された宇宙は信仰者にとって、神の栄光を歌っていると言えます。地球に住むわたしたちにとって、太陽と他の星の輝きは、神の栄光の輝きを映し出すものです。その観点からいえば、創造された宇宙全体の冠は人となられた神の子イエスです。彼の生活は神の秤において、純金を超える重さを持ち、神だけがそれをふさわしく評価することができます。神の栄光をそのように理解するなら、カナのぶどう酒は主の生活全体を神の栄光の現れとして照らすのです。その頂点は当然、その受難と死です。言い換えるとカナのぶどう酒は、神の愛の最高の表現、神とご自分の民との結婚が完全にされることを指し示しています。わたしたちは、ミサに与る度ごとに、その言い表し難い一致に与るのです。そこでは、水がぶどう酒に変えられるのではなく、ぶどう酒は、この世における神の栄光の最高の輝きを意味する、尊い御血に変えられるのです。

J. E. ペレス・バレラ S. J.